

和歌：文苑

著者	蝶々子, 江楠生, 松露生, 溪川生, 古賀, 憲, 一露庵
雑誌名	龍南會雜誌
巻	48
ページ	44 - 46
発行年	1896-06-28
URL	http://hdl.handle.net/2298/4966

は、れ、大、厦、の、倒、る、一、木、の、よ、く、支、ふ、可、き、に、あ、ら、ず、忠、度、も、終、に、西、海、の、波、の、花、と、散、り、
ゆ、き、て、行、客、の、涙、を、灑、か、し、む、る、こ、そ、か、な、し、け、れ、

黒本藤堂先生批點

鏡川納涼

硯友會員 蝶

々 子

月影もこゝろもともにもすみわたる鏡川原の夏の夕かせ

鏡川鶉舟

かゝり火に明ゆく空もしらさりき鶉かひの舟の瀬を尋ねつゝ

郭公

ほどゝきすなき行く末はまら雲のたえ間にのこる夜半の月影
みしか夜の月のふけ行く大そらに一聲高くなくほどゝす

五月雨

浅間山みねの煙のまつむまでふりくらしつる五月雨のそら

水邊納涼

すゝしさは何にたどへんかたもなし波のよりくる大嶋の岬

路卯の花

硯友會員

江

楠

生

卯の花の月にまかひて咲く頃は暮れてもみちはまよはさりけり

菖蒲

さみたれに刈る人もなくあやめ草あやめもわかすまけりけるかな

蚊遣火

夕月の影をへたつる蚊やり火の烟いふせき山本のさと

名所月

弓張の月はさやかにすみの江の松より外にいる方そなき

卯の花

うの花のさける夕のおとは山音なき波そたよひにける

源實朝

あつさ弓つるか岡邊の風をいたみ矢並つくらふひまなかりけり

夕雲雀

牧の子が吹く草笛の音はたえて入日の岡に雲雀なくなり

穉堂先生評、古音

川納涼

うすき川は吾郷の白杵にあり
松島は此川の海に注ぐ處にあり

夏衣うすきの川の川風につきまづ嶋の夕すゝみかな

新竹

たけの子も一よくに生のひて垣にゆふへく早なりけり

古賀憲

硯友會員 松露生

硯友會員 溪川生

全評、勉學之志油然生

文苑

夏月

やり水になかるゝ影をなかむれば秋かどを思ふ夏の夜の月

全評、涼意宛然

螢

うち群れて飛ひかふ螢心あれやよるゝ文の窓てらすなり

夏月

一露庵

敵やり火のけふりきえゆく中空のさゆれば明るみしか夜の月

溪月

やまかつも渡りかねつるたに川の淀のそこひに月影そすむ

晝寝の夢

中内蝶二

面壁三年の趣は知られど、晝寝半日の味は忘れがたし。一千九十五夕日の坐禪、悟り得し處幾何ぞ。六時間の夢、うつゝに感ぜしわが詩情は、白紙を汚すこと日に一丈。

蜀魂歸去來をうたふ男あり

片足は舟にのこりてほとよきす

牡丹とは奢の外のをぞりかな

わか門に笛の音やみぬ夏の月

夏の月寝るを苦にしてわかれけり
結ふ手に松風通ふ清水かな